



何げなく開いた雑誌に、「ひとりがりのものさし」という、古物商をやっている人のコラムがあった。

200年前の正統英国純銀製のスプーンの話で、まず1本押し売りすれば、後は黙っていても「もう1本」となり、年に10本程だが、その店タン

トツのロングセラー商品らしい。写真を見ると、何の変哲もないスプーンだ。使うとその魅力が判ると言うことだろうか？ でも、無粋な私にはたぶん理解できないだろうと思う。

貴族の牛車を牽く牛が花形だった平安時代。牛の世話をし、牽牛を導く牧童だった甯直麿は「国牛十図」という絵巻物で、但馬牛を「逸物おし」と高く評価した。しかし同時代に書かれた「駿牛絵詞」に取り上げられた駿牛52頭のうち、但馬牛は2頭だけ

だ。

「駿牛絵詞」でも、但馬牛を「勢いよく、なりよく心又逸物なり」と評しているが、派手さに欠け、貴族好みでなく、はやらなかったのだろう。

荷物の運搬や農耕を担う庶民の家畜となった江戸時代、畿内の牛流通拠点だった大阪天王寺牛町を仕切る大博労石橋孫右衛門は「種牛は内国にては但馬牛に限る」「雌雄とも良牛なり 耕耘すに事永く ぐく上等とす」と絶賛した。そんなことから但馬牛はとても高価で、「農宝」といわれながら、10石以上米を作るような大百姓しか自分の牛を持てなかった。

1960年代から使役に使われることはなくなり、肉用牛となる。高度経済成長に支えられ、高級牛肉の需要が増えた。但馬牛は、霜降りと呼

ばれる細かい脂肪が入り、筋線維も細く、柔らかな味の良し高級牛肉になる牛だとされ、黒毛和牛を改良する資源として、松阪牛や近江牛などのブランド牛肉に育てる素牛として全国から購買者が集まり、高値で売れた。ところがバブルといわれた

好景気が破綻し、平成不況になった。このまま但馬牛を維持すべきか、他県の大形の血統を入れて改良すべきかというところまで追い詰められた。

この但馬牛最大のピンチの中、農家や食肉事業者、畜産の技術者や研究者が議論を重ね、他県の牛を入れず、但馬牛を維持することになった。こんな理屈に合わない選択をしたのも但馬牛に捨てがたい魅力があったからなんだろう。

そして今、肉としての但馬牛、神戸ビーフも、子牛としての但馬牛も空前の高値になっている。

物の価値は人によっても違い、時々社会状況や目的によっても変わる。しかしいつの時代も魅力を持ちつづけるものがロングセラーになるとしたら、但馬牛と正統英国純銀製スプーンは似ているかもしれない。これもひとりよがりかな？

捨てがたい魅力



但馬牛の子牛共進会の様子＝新温泉町歌長

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。